

戦争に負けることは避けられまいが、君はあらゆる戦いに勝つだろう。

ジョゼ・サラマーゴ『イエス・キリストによる福音書』

ついに待ち人が来て、
家の扉が開いて、
再び明かりが灯った。

(……)

我々は再び家に入った。
全員いつもの顔見知りだった。
皆約束を守ったのだ。

ホセ・レサマ・リマ「待ち人」、『磁力への断片』

風に舞う塵
僕らは所詮風に舞う塵
風に舞う塵
すべては風に舞う塵
風……

カンサス「すべては風の中に」、アルバム『暗黒への曳航』（一九七七年）収録
作詞ケリー・リザグレン

1

アデラ、マルコス、そして優しさ

……本物は何もない、偶然を除いて。

ポール・オースター『ニューヨーク三部作』

家族からの電話を知らせるトランベットの音を聞いたアデラ・フィッツバーグは、アイフォンの画面に現れた〈母〉の文字を見て、何も考えず即座に反応した。そのほうが面倒を避けられることが経験上わかっていたので、緑色に震える受話器のアイコンにさっと指を滑らせた。

「ロレタ？」相手は母以外ありえないのにアデラは問いかけた。

つい三時間前のこと、おそらく本当に〈ライト〉らしい偽ギリシア・ヨーグルトにシリアルとフルーツを混ぜた朝食をいつもどおり無気力にとりながら、毎日マルコスが淹れてくれるコーヒーマグの香りを鼻に感じて、やっと少し元気が出てきたところで、アイフォンに手を伸ばす誘惑に駆られた。

滅多に感じない衝動に屈して通話履歴を調べてみると、〈母〉はこの十六カ月間、一度も自分から連絡してきたことがなかった。アイフォンの記録によれば、この間、不安を押し殺してロレタに電話をかけていたのはいつも彼女であり、しかもそのペースは月二回に上っていた。普段は滅多に気にしないことを確かめたせいでテレパシーが生じたのかもしれないが、おかげでアデラは不意を突かれずにすんだ。単に一時の気紛れかもしれない、そう思って、何も考えずに身を投げることにした。首尾よく生き延びれば奥底まで見透かせるだろう。

「ああ、コシ、あんた、元氣？」

酒と煙草に溺れた者にありがちなしわがれ声——母は煙草など吸ったこともないと断言していたうえ、娘も、ブラディーマリーや赤ワイン二杯以上の強い酒を飲む母の姿を見たことはなかったが——、スペイン語を話している時についきつい調子で「あんた」と言ってしまう癖、コシという赤ん坊の頃からの呼び名——アデラと呼ぶのはよほど機嫌が悪い時で、もっと怒り心頭になると、「アデラ・フイ、ツバグ」と姓にも名前にもアクセントをのせた——、もはや疑いの余地はなかった。しかも、これほど久しぶりにロレタからかけてきた電話が彼女の一日を台無しにする、そんな確信がすぐに深まっていくにちがいない。母はいったい何のために……？

「ええ…… 仕事は…… 今着いたところ…… 元気にしてるわ……」相手に元氣かどうか訊き返す気にはならず、何があつたか訊くなど論外だった。エクस्प्रेसウェイ——ロレタによれば、世界と娘の肺を毒する道路——の地獄のような渋滞のせいでまたもや仕事に遅刻し、電話どころではなかったが、話は後にしてほしいなどとはとても言い出せなかった。

「よかったわね…… 私に死にそうよ……」

「具合が悪いの？ 何かあったの？ そっちは今何時？」

「今…… 六時十八分…… まだ真っ暗。暗くて、少し寒い…… いえ、病氣じゃないのよ。体は大丈夫…… ただ娘を愛する母として電話しているだけよ、コシ。愛しているからこそ、話さずにはいられないの。いいかしら？」

「もちろん、もちろん…… 〈体は大丈夫〉って、どういうこと、ロレタ？」

アデラが目を閉じると、母が悲劇を語り出す時の定番、長い溜め息が聞こえてきた。無意識の復讐なのだろうか、母が彼女をコシと呼び慣らす一方で、子供の頃から彼女は母を名前でロレタと呼び、「母さん」と呼ぶのは、殺してやりたいと思う時だけだった。

「彼とはどうなの？」

今度はアデラが溜め息を漏らした。

「随分前に、彼のことは何も知りたくないと言ったじゃないの。そんなことのために電話してきたんじゃないでしょう？」

今度はもっと長く、深い溜め息。本当の溜め息だろうか？ 最後に向こうから電話があった時の会話で母は、二度と娘の私生活に口出しはしないと誓ったうえで、もっと糞まみれになりたいのなら勝手にしなさい、しまいは糞を嗅ぐばかりか飲むことになるだけよ、と捨て台詞を吐いた。母が自分の言葉を守るタイプであることはアデラにもよくわかっていた。

「ヘリンゴ」を始末しなきゃならないの」眠れぬ夜を過ごした声がようやく言葉を発した。

「何の話なの、お母さん？」

突然の雪崩のように現れた栗毛のまばゆい馬、額に白毛の星があるせいでヘリンゴ・スターと呼ばれるようになった馬の姿がアデラの頭を埋め尽くし、母の姿が消えた。ロレタがタコマ近郊で馬の牧場ヘシー・ブリーズ・ファームに居を定めて以来、あの美しいクリーブランド・ペイは、最初にして最高の愛であり続けていた。悲しくとも品位を失わぬ男のようにいつも青白い涙目で見つめてくるあの成熟した種馬は、到着まもないロレタとすぐに意気投合した。

ロレタが国内北西部にあるあの牧場に住み始めて、もう十年、十二年ぐらいになるだろうか。この間ずっと彼女は、あの種馬の世話こそ自分の使命だと言い張り、生涯を通じて誰にも、何に対しても捧げたことのない献身を発揮して馬に仕えた。アデラ自身も、イギリス王室の馬車を牽いた駿馬の系譜を汲むこの馬の寛容な背に跨り、熱い血の牡馬には珍しいほど従順な性格、そして力強い足取りを頼みに、母が引きこもった世界の片隅、あの牧場と森を散策したことがあった。

「何度も同じことを言わせしないで、コシ」

「でも、いったい何があったの？ この前話した時は…… 確かに、もう随分前になるけど……」娘は気まずい思いで口ごもり、電話をかけてきた母に対し、またどうせいつもの愚痴が始まるのだらう、あるいは、恋人とハイリアくんだりで同棲を始めた自分の選択や恋愛を嘲るつもりだろう、などと考えたことを後悔した。ともあれ、これで一日が台無しになることに変わりはないと宣告された。

「結腸よ…… リックと一緒にこの数日いろいろ試してみただけ…… セカンド・オピニオンを求めて…… この地区で最高の獣医が診察してくれていたの。でも、二日前に診断が確定したわ。腹部に穿刺をして…… 事態は深刻よ。高齢でもう手術は無理だけど、体が頑丈すぎて、私たちにはとても…… もうわかってはいたけれど、獣医から、できることは一つしかないと言われたわ」

「ああ…… 苦しんでいるの？」

「ええ…… 何日か前から…… 鎮痛剤を打っているわ」

アデラは喉が締めつけられたように感じた。

「打つ手はないの？」

「ないわ。奇跡は起こらなかった」

「〈リンゴ〉は今いくつ？」

「あなたと同じ…… 二十六…… そうは見えないけど、もう高齢なのよ」

アデラは一瞬考え、喉に力を込めてから答えた。

「助けてやるしかないわね、ロレタ」

電話越しに再び溜め息が届き、アデラは待ち構えた。

「そうするつもりよ…… でも、自分で手を下すべきか、リックか獣医に任せるべきか、わからないの」

「自分でしたほうがいいわ。愛を込めて」

「そうね…… すごく辛い。わかるかしら？」

「もちろんわかるわ…… 母子も同然なのだから」他意はなくこの言葉が出てきた。

「だから辛いよ…… だから…… あんたにはまだわからないでしょうね、母なのに何もしてやれない…… 母であることの喜び、辛さ……」

「辛い思いをしたのよね？ でも、何をしてやれるというの？」こらえきれずアデラは問いを向けた。厳肅な瞬間とはいえ、いつもどおり、またまんと毘にはまって、母からの応酬を待ち受けた。だからこそ、次のロレタの言葉は意外だった。

「それだけ話しかかったの。あんたが元気が確かめて、あんたが大好きだと伝えたかったのよ、それから…… コシ、これ以上もう話せないわ、これから……」

「アイム・ソー・ソーリー……」アデラはそう言った瞬間、最後の自分の問いがいかに愚かしかったか、母がいかに深い苦悩を味わっているか、初めて思い知った。母はずっとスペイン語で、キューバ人を丸出しにして「あんな」と話しかけてきた。この一年半の経験則を覆すようにして、電話をかけてきたのも彼女なら、話を切り上げたのも彼女だった。やむなく下した決断に打ちのめされ、すでに兆しの見えていた口喧嘩を受け入れる気力さえなくしていたに違いない。

しばらくじっとアイフォンを見つめていたアデラは、避ける術もなく想像力に飲まれ、母が不気味な金属の注射器を手に、栗毛に覆われた「ヘリンゴ」の首に薬物を打ち込んで永遠の眠りへと送る姿を思い浮かべずにはいられなかった。額に星をつけて生まれてきた馬の賢く甘い目が記憶の底から彼女を見つめてくる。アデラは事務机の一番上の引き出しに携帯電話を放り出し、少し荒っぽく閉めた後に立ち上がると、廊下を伝って玄關ホールへ出た。このビルには、キューバ関連文献の専門家として辛うじて職にありついた大学の部署（特別コレクション

課〉が入っている。受付担当のヨアンドラのテーブルに差し掛かったところで彼女に声を掛け、息抜きにコーヒーでも飲んでくると告げた。

「どうかしたの？」ヨアンドラが問いを向けた。

「ええ…… いえ、何でもない……」母からの電話と馬の目の残像に掻き乱された感情を説明する気にはならず、アデラは口籠ったが、ヨアンドラのほうへ向き直って言った。「煙草はある？」

ヨアンドラは眉を吊り上げて相手を見つめ、ハンドバックにしまっていた箱から一本取り出した。

「そんなにひどいこと？」問いを向けながら彼女は煙草とライターを差し出した。

アデラは溜め息交じりに礼を言っ、なんとか笑みを浮かべようとしたが、相手がコンピューターの画面を指差しながら、どうやらオバマ大統領は本当にキューバへ行くらしい、たいしたものね、と話題を振ってきた、頷くのがやっとだった…… 図書館の建物を囲む庭には木立があり、そこへ出ると、四月の朝早い時間でもすでに蒸し暑いマイアミの空気が押し寄せてきた。北のほうの空が曇っており、また午後にはハイアリア、そしてマイアミのもとと南までスコールに見舞われる事態になれば、帰りは〈バルメット〉を通らねばならず、心身とも疲労に打ちのめされることになる。

淹れたてのキューバ・コーヒーの香りを辿りながらキャンパスを進み、人文芸術学部校舎一階にある軽食堂でコーヒーを注文して、少しでも砂糖を入れた。プラスチックカップを手に再び庭へ戻ると、できるだけひっそりとした日陰を選んでベンチに座り、コーヒーを啜りながら、何か月ぶりかとも思いつけないほど久しぶりの煙草にこっそり火を点けた。こんなクソの日にはクソ煙草が一番、そう思いながら彼女は、押し寄せるニコチンをたっぷり味わうことで自分の弱さを撥ねつけようとした。その瞬間にアデラ・フィッツバークは、この不快の原因が老いた〈リンゴ〉の処分という差し迫る事態だけではないことを確信した。それだけではないのだ。悪い知らせで娘の一日に影を差す以外、ロレタはいったい何を思っ、電話をしてきたのだろうか？